佐藤春夫『女誡扇綺譚』論

――「私」と世外民の対話構造が意味するもの――

朱　衛　紅

一　『女誡扇綺譚』の成立

「台湾はどんなところであるか、領台二十余年後の今日でも内地の人で台湾を知つて居るひとは極めて少数である（中略）内地の人は今尚台湾といへば生蕃と云ふことを連想する。是が抑も大なる謬である。今日台湾新付の同胞は凡そ三百五十万人であつて其殆んど凡てが皆漢民族であつて（中略）蕃人の為に危険を感ずると云ふが如き事は皆昔の夢で（中略）実に今の台湾は南方の楽土である。産業と云ひ教育と云ひ衛生と云ひ其の改善進歩は領台以前と比較して雲泥の相違がある」。大正九年七月東洋協会から『大正九年　現在の台湾』が出版され、以上のように台湾の状況を宣伝し、日本人特に日本の知識人が台湾現地に行き、自らの目で台湾を確かめることを呼びかけていた。

佐藤春夫はちょうど大正九年の六月から一〇月にかけて台湾を訪問している。しかし当時の台湾は前記の紹介と異なり、危険がないわけではなかった。大正七年から林献堂を中心とする抗日民族運動や議会設置運動がはじまり、大正九年九月一八日には、日本の植民地政策に不満を持つサラマオ先住民が分遣所を襲撃し、多数の死傷者を出した事件も起こっている。佐藤は、こうした民族運動がたけなわの時期に台湾を訪問し、激動の時代にあった当時の台湾の現実を、自らの目で見ることとなった。

ひと夏におよぶこの台湾、および福建旅行の体験をもとに、佐藤は一〇篇近くの小説・紀行文・小品などを発表している。台湾を取材して執筆した作品は大正一三年の六月に『旅人』や、大正一四年の三月に『霧社』、五月に『女誡扇綺譚』（『女性』）などといった台湾ものとして発表し、昭和七年にはさらに『植民地の旅』等が発表された。

『女誡扇綺譚』はこのうちの唯一の本格的な小説であり、またもっとも議論のある作品である。作者自身がこの作品を愛して、心ゆく作品のうち、五指の中に加えられるだろうといい、ついにはこの物語だけを単行本として出版するまでになった。橋爪健は「異国情調と伝説と現前の風物とを錯絡たらしめるその怪奇小説的構想と、それら三者相俟つて幻現一如の近代的三昧境を描出してゐる」[1]と評価した。島田謹二は橋爪の論をさらに緻密に展開し、「素材と取扱いの二方面から見て典型的な異国

情趣の文学なのである[2]」と論じている。この島田の論は『女誡扇綺譚』論の決定版と言われている。

しかし、最近になって藤井省三は『女誡扇綺譚』に対し異国情趣の文学という解釈を与え、植民地支配や台湾ナショナリズムの問題を無視してきた従来の〈知〉の制度はやはり日本版オリエンタリズムだと島田論に批判を加えている。『女誡扇綺譚』が台湾を舞台にし、台湾人を主たる登場人物として植民地支配のために悲劇に終わる台湾人の恋愛を描いていることから、「台湾ナショナリズムへの友愛に溢れるまなざしによって書かれた」ものとしている[3]。

私見では藤井省三のこれらの見解に対して、『女誡扇綺譚』の異国情緒文学論を批判する指摘に賛成である。しかし『女誡扇綺譚』の中では、〈事件〉自体が小説の主題というよりも、むしろ安平の風物およびその事件をめぐる「私」と現地人・世外民の対話と行動が中心になっていると考えられる。本稿では「私」と世外民とのあいだに生じる対話と両者の行動の差異の構造について、作品の具体的な分析を通して検討し、これにより佐藤春夫がどのような視点で当時の台湾の現実をとらえ解釈して、作品化したかを明らかにしたい。

なお『女誡扇綺譚』は、大正一五年単行本として刊行され、さらに昭和一一年短編集『霧社』に収録された[4]。それぞれの版に違いがある。

二　安平と〈荒廃の美〉

『女誡扇綺譚』は赤嵌城址・禿頭港の廃屋・戦慄・怪傑沈氏・女誡扇・エピローグの、六章節の構成になっている。これらの六つの章が展開するプロットは比較的わかりやすい相互関係を有しており、作品の全体としてのストーリーは自然に展開していく。「赤嵌城址」と「禿頭港の廃屋」の二章では、日本人新聞記者の「私」が、現地の友人世外民の案内で、安平の「禿頭港」周辺を見物するところからはじまり、「私」の目を通して、安平の港湾や赤嵌城址そして廃屋といった風景が紹介される。

台南市の西端れで安平の廃港に接するあたりではあるが、さうして名前だけの説明を聞けばなるほどと思ふかも知れないが、その場所を事実目前に見た人は、寧ろ却つてそんなところに港と名づけてゐるのを訝しく感ずるに違ひない。それはただ低い湿つぽい蘆荻の多い泥沼に沿ふた貧民窟みたやうなところで、しかも海からは殆んど一里も距つてゐる。沼を埋め立てた塵塚の臭ひが暑さに蒸せ返つて鼻をつく厭な場末でそんなところに土着の台湾人のせせこましい家が、不行儀に、それもぎしつりと立並んでゐる。

『女誡扇綺譚』を創作する契機となったのは、佐藤が廃港を中心とするこの安平の地を訪れて受けた感動である。そのことは『かの一夏の記』のなかで、「打狗にゐるうち安平を見て感興を得たものが女誡扇綺譚である」、「女誡扇綺譚の建物や安平

の風景は実景のつもりである」と記していることからもわかる。

ところで、長年台湾に生活していた新垣宏一は「佐藤の文（『女誡扇綺譚』――引用者注）には、禿頭港の意味などを面白く説いている」が、安平には禿頭港という港は実際には存在せず、その風景は台南の仏頭港あたりの風景であると指摘している。[5] そこから『女誡扇綺譚』は物語の舞台を安平に取り、その風景描写を克明におこなったことが何を意味しているのかという問題が生じてくる。

日本の台湾統治は土地測量・改革に始まり、日露戦争後の明治三九年には、台湾の殖産活動、特に製糖産業が強化され、さらに樟脳、バナナ等の専売化がはじまる。大正八年には台南に塩水養殖試験場が作られ、安平一帯にも稲田の養魚試験、海老などの養殖試験などが実施される予定になっていた。[6] 作品の中で、「私」と世外民はトロッコに乗って、安平の養魚場のあたりに来ている。

台南から四十分ほどの間を、土か石かになつたつもりでトロツコで運ばれなければならない。坦々たる殆んど一直線の道の両側は、安平魚の養魚場なのだが、見た目には、田圃ともつかず沼ともつかぬ。海であつたものが埋まつてしまつた。（中略）トロツコの着いたところから、むかし和蘭人が築いたといふ TE CASTLE ZEELANDIA 所謂土人の赤嵌城を目あてに歩いて行く道では、目につく家といふ家は悉く荒れ果てたままの無住である。あまりふるくない以前に外国人が経営してゐた製糖会社の社宅であるが、その会社が解散すると同時に空屋になつてしまつた。

長年にわたる戦乱、経済的な植民地支配としての植民地産業開拓――単一作物、例えばサトウキビの栽培などは土地を痩せさせてしまい、台南、安平を荒廃させた。佐藤が描いているのは、その結果の風景である。殺風景な安平の風景描写の中に、佐藤の作品はこうした荒廃の元である安平地方の植民地の歴史をうっすらとではあるがたしかに喚起している。まぎれもなく安平はオランダの植民地支配、戦乱を二重に伝え、当時の日本の植民地下にある現状にもつながる象徴的な場所であった。

一方、安平の風景は日本人旅行者の「私」を通して紹介されているため、小説の中の「私」の視点というバイアスが存在している。

人はよく荒廃の美を説く。又その概念だけなら私にもある。しかし私はまだそれを痛切に実感したことはなかつた。安平へ行つてみて私はやつとそれが判りかかつたやうな気がした。そこにはさまで古くないとは言へ、さまざまな歴史がある。この島の主要な歴史と言へば、蘭人の壮図、鄭成功の雄志、新しくはまた劉永福の野望の末路も皆この一港市に関連してゐると言つても差支ないのだが、私はここでそれを説かうとも思はないし、また好古家で且詩人たる世外民なら知らないこと、私には出来さうもない。私が安平で荒廃の美に打たれたといふのは、また必ずしも

その史的知識の為めではないのである。（傍線引用者）

安平はオランダ人が築いた赤嵌城や、オランダ人の侵略に抵抗して鄭成功が起こした戦いなどによって有名な場所である。一六二二年、オランダの艦隊が、台湾を占領した後、一六二四年まで三年をかけて、安平に城塞――赤嵌城を建設する。その後、全オランダ特設東インド会社は産業開拓を始め、安平周辺は「サトウキビ畑になり、農業資本主義風の単一経済作物地帯」[7]となった。一六六一年、鄭成功が全耳門より台湾に上陸・進軍し、一六六二年赤嵌城のオランダ人が投降、帰国する。しかしその後、ほぼ二百年経った一八九四年に日本は日清戦争を勃発させ、敗れた中国に強制的に下関条約を締結させる。台湾住民は「台湾民主国」の独立を宣言し、台湾割譲反対を表明し、劉永福を民主大将軍に任命した。その後、劉永福は台南の知識人・資産家の要請によって安平に移住し、台湾割譲に抵抗したが、日本の台南占領により、アモイへ脱出する。これによって台湾民主国は滅亡した。

右掲引用文の傍線部はこのような台湾・安平の歴史を背景とするものである。この傍線部は『女誡扇綺譚』が単行本として刊行された際に書き加えられたものであるが、そこでは、より具体的に台湾・安平の植民地の歴史に言及しようとする姿勢が見受けられる。ただそれが単行本段階であることに注意する必要があろう。

日本人の「私」は安平における植民地支配の歴史よりも、むしろ荒涼たる風物美に心を打たれている。このような荒涼を極めた安平に、「私」と世外民は大きな廃屋を見つけた。「私」が廃屋の中で「少しばかり氣に入つた点と言へば、その道具立てのすべて大きくその色彩が悪くアクどいことにあつた（中略）そのなかにある人物は根強く大陸的で、話柄の美としてはそれが醜と同居してゐるところの野蛮のなかに近代的なところがある」、「哀れむべきさまざまな不調和を見出すより前にただその異国情緒を先ず喜ぶといふこともあり得る」という。そこでの〈異国情緒〉とは、小説の全体からすると、一種縹緲のもの、霊的のもの、根強く大陸的のものとなろうし、それが「私」のいう〈荒廃の美〉であろう。

明治末期、谷崎潤一郎、木下杢太郎らがパンの会を作り、耽美派運動を行った。そして、このパンの会はある意味では、〈エキゾチズム運動〉でもある。佐藤はこうしたパンの会の流れを受けついだ文学者であった。彼は台湾を訪問する前に、エキゾチシズムの溢れる『李太白』や『西班牙犬の家』等の作品を書いている。そうした経緯から見ても、先の引用部での「私」の視点には佐藤自身の視点が重ねられていたと考えられる。

また大正一〇年代前後、多くの植民地を題材にする作品が現れ、野蛮美を追求する植民地エキゾチシズムという時代的な傾向も現れている。当時出された台南、安平に関する紹介物にもこうしたやや安直なエキゾチシズムが浸透している。例えば『台湾事情』[8]などのような比較的、客観的な情報を提供するものであっても、ほとんど赤嵌城址のオランダ風建物や日本植民地の経済政策の成果（製塩工場、養魚場）の紹介に集中している。中でも、『台湾遊記』[9]は一旅行者の台南、安平体験が詳し

く書かれてあり、当時の日本人の台湾をみる視点が伺われる。ここでその一節を引用しておきたい。

> 樓（赤嵌樓――引用者注）上遥かに四周を大観すると、全市悉く一眸の中に集まり、安平港を指向の間に眺め気宇自ら軒昂たるものあり。彼の鉄幹の
>
> 赤嵌樓に旌旗動けり江に入るはバタビヤの船かチヤルメラ聞ゆ。
>
> の歌を思ふ。（中略）樓屋の裏手に、公学校の女生徒が大きな榕樹の木陰にダンスをしてゐる。まことに巧妙であつた。遠き昔に聞いた紅毛人の文化の跡に、支那式の丹碧鮮かなる色を染め出したるこの地に、近世文明の光りを注ぎ、今や紅毛城下赤嵌樓を仰いでダンスを舞ふ。こゝに西洋、東洋、将た日東の文化の色とりぐに交へて咲いた三色菫の匂ふが如くに麗はしく言ひ知れぬ無限の感興に打たれ、樓上に佇立して瞑目して文を思ふ。

台南や安平をめぐるエキゾチシズムの特色ばかりに目を注いでいるこの旅行者の視線は『女誡扇綺譚』の「私」の安平を見る視線に通じるところがある。南の熱帯の緑々、オランダ風建物、禿頭港の〈荒廃〉の中に残っている昔の栄華の跡などというエキゾチックなものばかり求める「私」の視点は、まさにこうした植民地エキゾチシズムを追う時代の流れを反映していたのである。

三　〈女誡扇〉と生きた精神

一方、前掲の『台湾遊記』等の作品と違い、『女誡扇綺譚』では「私」と正反対な視点を持つ台湾人の世外民が設定されている。

> 私は歴史なんてものにはてんで興味がないほど若かつた。（中略）さういふ程度の私だから、同じやうな若い身空で世外民がしきりと過去を述べ立てて詠嘆めいた口をきくのを、さすがは支那人の血を受けた詩人は違つたものだ位にしか思つてゐなかつたのである。

世外民は歴史に興味を持たない「私」と対照的に、しきりと過去を述べ立てて詠嘆めいた口をきく。彼の口を通して台南植民地の歴史が紹介され、そうした荒廃の中に生活している台湾人の心情も伝わってくるのである。

「戦慄」と「怪傑沈氏」の二章では、廃屋の持ち主であった沈家の祖先の所業や沈の娘の話が近くに住む老婆の口を通じて語られる。祖先の悪業がもとで、沈は主人になった時天罰を受け、持船が全部颶風に奪われた。その後、沈の娘の縁談が相手によって破られる。しかし、沈の娘は「永遠の希望」を失わず、いつも美しい着物に盛装して、廃屋の楼上から、海辺を遠望し、とこしえに来ぬ夫を待ちつづけた…

沈の娘の哀話は、安平に流布している普通の伝説かと思われる。ただ『台湾民族性百談』[10]によれば、当時の台湾には様々な

民間信仰があり――その信仰は主に漢民族の流れを汲んでいるものであるが――それらには必ず崇拝の対象がある。一つは自然崇拝からきたもので、一つは霊魂崇拝からきたものである。このように考えれば、『女誡扇綺譚』における娘の霊の話は霊魂崇拝の信仰が生み出した哀話とみることができる。

沈の娘の死後、彼女の霊がまだ廃屋に残っていると、港の人達は信じている。世外民もまた、老婆から沈の娘の悲話を聞かされ、それに共感し、廃屋の二階から洩れた女の声を死霊の声と信じたいと「私」にいう。一方「私」は、きわめて合理的に、情夫を待つ生きている若い女の声だと推理し、古いものにこだわりすぎると近代化ができないため、国は滅びていくと考えている。この「私」の見方の背景と関係するものとして、沈の祖先の伝説というかたちで台湾植民地史上のいくつかの事蹟が具体的に説明される。この部分には、藤井が指摘した通り、「物語の現在における日本支配のありかた」をもみごとに映し出している。[11] 作品の中での「私」は、沈の祖先のような強欲でしたたかな性格の人間は、植民地開拓の草創期において必要とされる英雄であると解釈する。つまり「私」は無意識のうちに植民者の立場に立っていた。それに対して世外民は、沈の娘の悲話に亡国の民の嘆きを聞こうとするかのようである。被植民者の屈折した思いをそこに読み取ってよかろう。

「私」と世外民は台南市の旗亭で〈事件〉――女の声の謎を論じ合う。ここの二人の議論のくだりには、『女誡扇綺譚』の主題に近い内容が展開されている。

「では言ふがね、亡びたものの荒廃のなかにむかしの霊が生き残つてゐるといふ美観は、――これや支那の伝統的なものだが、僕に言はせると、……君、憤つてはいかんよ――どうも亡国的趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるものか。無ければこそ亡びたといふのぢやないか」

「君！」世外民は大きな声を出した「亡びたものと、荒廃とは違ふだろう。――亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廃とは無くならうとしつつある者のなかに、まだ生きた精神が残つてゐるといふことぢやないか」

世外民は「荒廃」したものとは「亡びたもの」と違い、「生きた精神」をその中に残していると主張する。この「生きた精神」とは、単なる迷信による、霊の存在の主張ではなく、時代が変わり、禿頭港が荒廃した現在でも、港の人々の身体には、彼らの祖先の精神と文化伝統を継承するなにかが存在している、ということである。世外民の「生きた精神」の主張はそこにあった。〈廃屋事件〉は単なる縹緲とした霊的な問題をこえて、抑圧された民族精神と文化伝統の問題に昇華していたのである。しかしそれに対しても、「私」はあくまで廃屋で男と逢引きする生身の女の声だという意見を変えず、世外民の主張する「生きた精神」を否定する。ここでも〈植民地エキゾチシズム〉という「私」の視点は一貫していたのである。

後半の「女誡扇」と「エピローグ」の二章節では、謎の声の真実を究明するため、二人が沈家の廃屋を再訪し、二階で蓮の

花や『女誡』の一節を書き付けた一本の扇を拾う。その数日後、世外民は「私」に黄という娘の夢のお告げによって、廃屋で若い男の縊死体が発見されたと話す。それを「私」は縊死した男と黄の娘とは廃屋の中で逢引していた二人だと推測した。「私」が記者の名刺をもって、黄の家に出かけて行き、扇を黄の娘に突きつけると、意外にもカーテンの陰から涙をすすり上げる声とともに言葉が聞こえてきた。「…あなたが拾っておいでになつたその扇――蓮の花の扇を私にください。その代はりには何でもみんな申します」。事情を察した「私」は扇を残し、「私は新聞などへは書きも何もしやしないのです」と答えて帰る。

曹大家の女誡の「専心章」とは、後漢の曹昭の著『女誡』の第五篇「専心」のことである。それは、女性は天である夫から離れてはならず、夫に嫌われぬよう貞節を守り生活せよという、女の戒めを説いた内容である。その戒めの一つが「出無冶容、入無廃飾」ということになる。島田謹二は沈の娘について「実に執着して忘れ得ぬ欲情の変形」[12]であると批判するが、以上の典拠をふまえるならば、沈の娘の行動は実は「専心」にある、女の戒めに従った行動であったと分かる。「愛蓮説」というのは唐の文人周茂叔の文で、「予獨愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝…」といった内容になっている。「愛蓮説」と「曹大家の専心章」を比較してみれば、「愛蓮説」の方は「不蔓不枝」という表現を、女が純粋で、貞節を守らねばならないという意味にとっていることがわかる。

男が何らかの理由で恋人の女と離れて遠方に行き、一人取り残された女は毎日、家の楼に登って、男がいる方向を遠望し、男の帰りを待ちつづけるといった類の内容は、中国の古典文学の中によく登場する。例えば、佐藤春夫の愛読作品である中国清朝の戯曲、『桃花扇』[13]の中にも、このようなシーンがある。『女誡扇綺譚』が言おうとしていることは、このような女性の行為は女性の深い愛情を表現すると同時に、昔から中国の女性が教えられている貞操観念を堅く守っているということにある。作中の沈の娘、そして恋人と結婚できないため、恋人のあとを追って自殺した〈今日〉の下層階級の娘はこのような女性道徳に支配されている女性である。〈扇〉は二人の女性の接点になる。佐藤春夫は〈廃屋事件〉をただの若い恋人同士の情死事件としてではなく、当時港の人々の中に中国の伝統文化がまだ根強く存在していることを伝える目的でこのようなプロットを構成したのである。

一方、「私」は柔頭港の細民区の奔放無知な娘をひとり空想する。その娘は婦女の道徳について記してある沈の娘が持っていた扇を手にして、汗にまみれながら逢い引きする。「私」は「市井の英雄児ともいふべき沈の祖先」、「狂念によつて永遠に明日を見出してゐる沈の娘」、「野生によつて習俗を超えた少女」という三個の人物からエキゾチックなものを感じ愉快になる。

「私」と世外民の「不蔓不枝」の意味に関する会話はふたりが同じ東アジアのインテリ、いわゆる〈同文同種〉[14]の人間として、中国古典の教養を共有していることを示し、「私」と世外民の現実を見つめる目の違いを引き立たせている。文化伝統へのまなざしが歴史の中に生きる中国人の〈生きた精神〉を見つ

めることができるかどうかの差異である。そこに抑圧された民族の解放の願いが込められていることは確かである。「私」のように、歴史を捨象して、そこに〈荒廃〉の美しか見ないとすれば、それは民族の〈生きた精神〉にふれようとしない行為であるといってよかろう。中国文学通の佐藤春夫がこの作品で、「私」と世外民の対立する対話という形式をとった目的は、古典と歴史の価値を浮かび上がらせようとしたのである。

四　「私」と世外民

「怪傑沈氏」の最後に「私」と世外民の紹介の部分が挿入されている。この部分の紹介によると、「私」は台南新聞社の日本人編集者であるが、一方の世外民は中国の伝統を受け継ぎ、台湾の歴史にも強い関心をもつ台湾インテリである。「私」は当時ある失恋事件で自暴自棄に陥り、これまでの世間的な人間関係を否定した態度を持っていたため、世外民の投稿してきた漢詩にある反抗精神を喜んで、採録した。世外民の漢詩は統治上有害だと当局に注意され、採録は一度きりだったが、その後世外民が「私」の友人となった。

佐藤春夫には小田原事件があり、台南に旅行に行った間に台南新聞社から金を貰って執筆の依頼を受けた事情もあった。「『女誡扇綺譚』の話者について」[15]によれば、佐藤と台南新聞社との関係をめぐって、佐藤自身に問い合わせしたが、「台南新報から頼まれ、金を貰つて何か書く約束した」。金は「相当貰つたが、貰つた金だけのものは書かなかつた」というコメントを受けたという。以上のところから、「私」と佐藤は切り離せない関係にあると推測される。

作品は、一方で「私」の視点から台湾の風景や台湾人の生活を具体的に再現してはいるが、もう一方では、このような風景と生活の中にエキゾチックなものばかりを求めたがる「私」と、植民地支配を批判する世外民のような相対立する視点を並行させているのである。ここでの「私」と世外民の紹介は、一見事件と直接的な関係がないように見えるが、こうした二人の相対立する視点を支えるそれぞれの政治的文化的な背景の説明になっており、二人の人物を理解する上で重要な部分である。島田謹二は「世外民と話者との相対立する解釈が物語に探偵小説と同種の興味を与える」[16]と指摘している。「事件」をめぐって、「私」と世外民を対比させるという展開の探偵小説的構造は、日本人の「私」の声ばかりではなく、台湾人世外民の声も小説の中に組み込んだという説明にもなろう。

大正九年の台湾旅行から帰国した佐藤は、一二年を経たのちに『植民地の旅』（昭七年）を発表した。この作品において、台湾旅行当時佐藤が当局の監視の下に林熊徴（林献堂と思われる人物）と会談する場面が描かれている。そこで林熊徴は

> 我々本島人自身の自負としましては現在はたとひ無力ながらも古来伝統の深い文明を持つてゐた者であり、その文明の重要な一部分内地の教養ある方方とも共通のものと信じてゐる（中略）政治的地位の優越必ずしも文明の優秀を意味するやを問題とする者であります（中略）内地人本島

人の親和は（中略）その親和方法心持として同化であるべきか平等であるべきか

と佐藤に問いかけている。これに対し、佐藤は

私は敢て同化論でもなく平等論でもなく別に友愛によつてといふ一説を立てさせて頂かうと思ひます（中略）さうして今日これをなし得ないのは本島人内地人共に過度時代の未開の文明をもつてお互にそれを固守するには急なためであります

と答える。言うまでもなく、この佐藤の答えは現実に存在する抑圧や不平等という問題を人間一般の問題に解消してしまうことになる。だから林は「ところで御説のごとき文明は来る日がありませうか…」「苦しんでゐる側の状態の切実さを問題とすることをいつの間にやら閑却された傾のあるのは堂堂たる正論たる貴説のために最も遺憾ですね」と鋭く問いかける。佐藤はこの問いかけに、「自分の怪説の残骸を自分の胸のなかに蔵して居なければならないのを厭はしく感じた」と述懐させている。河原功は『植民地の旅』を「台湾知識人たちとの会見を織り込んで、植民地台湾における支配と被支配の関係を浮き彫りにしようとしていた作品」[17]と指摘している。さらに『植民地の旅』の発表時期が遅れたことについて、河原は「すぐに執筆あるいは発表の機会がえられなかったのは、台湾の代表的知識人を含めて、いずれも春夫が接触した実在の人物をモデルにしていたからであろう」[18]と推定している。しかし、『植民地の旅』の中に表れた植民地支配と被支配の関係や問題点は『女誡扇綺譚』の中に既に内在していることは、これまでの論述で指摘してきた。ただ『植民地の旅』の場合は、面談の形式で台湾知識人に語らせることになっているが、『女誡扇綺譚』の場合は「私」の事件をめぐる語りが中心になっている。「私」という視点が前面にクローズアップされているため、対比すべき世外民の視点が曖昧化されたことも確かである。この点が『女誡扇綺譚』をめぐって、島田謹二のように「異国情趣」という解釈が生まれた理由と思われる。しかし「私」の視点が作品の最後で変化していることにも注目しなければならない。

作品の結末で、「私」は事件の真相を知り、最後にこう述懐している。

穀商黄氏の下婢十七になる女が主人の世話した内地人に嫁することを嫌つて、罌粟の実を多量に食つて死んだといふのがあつた。（中略）この記事を書く男は、台湾人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦点を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた。――あの廃屋の逢曳の女、――不思議な因縁によつて、私がその声だけは二度も聞きながら、姿は終に一瞥することも出来なかつたあの少女は、事実に於ては、自分の幻想の人物と大変違つたもののやうに私は今は感ずる。（傍線引用者）

「私」の想像とは裏腹に、声の持ち主である「十七になる少

女」は「内地人に嫁することを嫌つて」、すなわち自分の貞操を貫いて「罌粟の實」を食って自殺した。引用部分の「私」の「あの少女は、事実に於ては、自分の幻想の人物と大変違つたもののやうに私は今は感ずる。」という述懐は、「私」の当初の想像を初めて反省すると同時に、世外民の言う〈生きた精神〉の主張を思い起こす内容となっている。知識人ばかりではなく民衆の心にも〈生きた精神〉がつらぬかれていたことを「私」はあらためて知らされたのである。

罌粟の實を食うという自殺の方法について、新垣の研究[19]によれば、こういう自殺の方法は台湾には例が少ないそうである。これは森鴎外の「罌粟人糞」（『うた日記』）という作品の影響であると彼は指摘する。この「罌粟人糞」の支那娘と黄氏の下婢とは事情が違っているが、中国の女性としての誇りを守ろうとする女性の心情に共通性が存在していると思われる。

当時の台湾では、日本への割譲以降、アヘンの専売化や大正六年に罌粟栽培の合法化[20]、それに厳しい文化統制が行われた。こうした日本の圧制を背景に、大正七年から林献堂を中心とする民族運動や議会設置運動がはじまり、民族意識が高まりつつあった。昭和四年台湾民衆党は総督府に抗議書を送り、「一時的な苦痛に同情し、永久の回復をはからないことは決して人道主義ではない。阿片吸食の新特許は国際正義や国際信用にかかわるものである」と批判した。それにもかかわらず、総督府はアヘン専売、阿片煙膏の吸食の特許料などにより莫大な収入を得たため阿片専売政策をつづけようとしている。当時の台南には台南新報社と台湾日日新報支局という二つの新聞社があったが、ともに御用新聞と言われ、阿片専売制度を支持する立場は共通していた[21]。世外民が投稿してきた反抗の気概に富む漢詩を採用したことで、当局から「統治上有害だと（中略）非常識を咎められ」ていた。作中のこのような当局の姿勢には、当時台南にあった二社の新聞社の「御用新聞」という立場が反映されている。

「私」がスクープを断念する一節について、藤井省三は「台北の『台湾日日新報』は植民地機構の準広報紙として勢威をふるったが、総督府から遠く南に離れた台南であれば、統治者意識をもつことなく、台湾人下婢の悲恋に同情してスクープを断念する記者の存在も想定できようというものである」と指摘している[22]。

私見ではこの藤井省三の論には疑問を感じる。というのは、台南新聞社は阿片栽培を支持する立場にたつ新聞社だったにもかかわらず、作品のなかで下婢が罌粟で自殺したというように設定されているからだ。さらに佐藤はこの作品を短編集『霧社』に収録した際、「私」が新聞社を辞める理由についてこう書き加えている。それは、同僚のひとりが下婢の自殺を取材し、「台湾人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦点を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた」という文につづけて、「それが原になつて自分は僚友と争論の未退社し、食ひつめて内地へ帰つて来た。――」と書いてもいるからである。

前掲の「『女誡扇綺譚』の話者について」は、佐藤春夫が『女誡扇綺譚』の話者を台南の新聞記者にした理由について、「佐

藤春夫氏は台南で新聞記者をした事実はない」が、「その頃の作者の心境の一面は写してゐる」と指摘し、「『台南新報』とのかすかな関係もひびいてゐないとはいへまいか」と推察している。佐藤春夫はなぜ『台南新報』に約束したとおりのものを書かなかったのだろうか。作品の中の新聞社に関する一連の設定は、佐藤が『台南新報』の記事の偏向性に対して批判的な見解を抱いていたことを示しているのではなかろうか。

一方、同じ「私」がスクープを断念することについて、島田謹二は「やはりヒュマニスムの精神へ達していると見なければならぬ」と指摘する。[23] このヒュマニスムの精神は『植民地の旅』において佐藤のいう「人間同志の友愛」と通じるものだと言えるが、黄の下婢の自殺を前にして、「私」がやはり無力さを感じただろうことも指摘しておかなければならない。「私」がスクープを断念することは、その段階において、まだ安易な、底の浅いヒューマニズム精神の現れとしか言えない。

五　エキゾチシズムの変貌——結びに代えて——

「私」は新聞社をやめて、日本へと帰る。その「私」との訣別を惜しんで、世外民が「私」に一詩を与えた。『女誡扇綺譚』が単行本として刊行された際、この漢詩の具体的な内容が加筆されている。

登彼高岡空夕薫　彼の高き岡に登れば空夕に薫るも、
天辺孤雁嘆離群　天辺の孤雁は群を離るるを嘆く。
温盟何不必酒杯　温かき盟ひは何ぞ必ずしも酒杯のみならむや
君夢我時我夢君　君我を夢見る時我君を夢みむ

（稿者による訓読）

小説の前半では、「私」と世外民の間に大きな距離が存在していた。〈廃屋事件〉の事情が解明された後は私がかつての植民地エキゾチシズムを反省し、一方世外民の方も上記の漢詩を贈ったということで、互いが理解者となったことが示されている。事件の解明を通して、「私」が植民地における歴史と伝統の問題を認識し、同化政策の矛盾に気づいた。「私」という語りの主体の優越性が崩され、世外民という他者の声を媒介にすることによって自己確認ができ、「私」の持つ植民地エキゾチズムが変貌していくのである。「私」を作家佐藤春夫の分身として見た場合、こうした変化は殖民地台湾を訪れた体験を通じて得られたものであり、それ以前の彼自身が抱いていたエキゾチシズムへの反省として解釈することができると思われる。

前述したとおり、『女誡扇綺譚』が発表されると、その異国情緒の溢れる描写は高い評価を受けた。しかし一方、橋爪は「ここに新しい感覚は露出されてゐない。時代の苦悶も、社会の意欲も積極的な何ものも呈示されてはゐない。[24]」と、社会性の欠如を批判している。それに対して、佐藤春夫は単行本『女誡扇綺譚』のあとがきに「但、作者はこの作を愛してゐる。さうしてこの作を悪評した評家を甚だ軽蔑する気持ちになつたことは事実である。作者はだん〳〵年とともに、浪漫的色彩を失ひつつある。その代わりに、何ものかが別に加はるだろうが、ともかくもこの作品は作者にとつて浪漫的作品の最後のもので

あるかもしれない。」と書いている。しかしその一方で、その後になって単行本或いは短編集として刊行された際、本稿の中で言及してきたように何箇所にも修正を加えている。それらの修正のほとんどは「私」の変化にかかわる箇所であり、それは〈浪漫的色彩〉すなわち植民地エキゾチシズムを批判するものであった。佐藤春夫の中で植民地エキゾチシズムが変貌していく契機を「私」と世外民との対話構造に見ることができるのである。

【注】

(1) 橋爪健「旧さの中の新しさ　五月創作評の七」『読売新聞』大一・五・七
(2) 島田謹二「佐藤春夫の『女誡扇綺譚』」『台湾時報』昭一四・九、『近代比較文学』光文社、昭三二所収
(3) 藤井省三「植民地台湾へのまなざし――佐藤春夫『女誡扇綺譚』をめぐって」『日本文学』平五・一
(4) テキストの引用は講談社『佐藤春夫全集』により、単行本版となっている。又引用の表記については、旧漢字は新漢字に改めた。
(5) 新垣宏一「『女誡扇綺譚』――断想一つ二つ――」『台湾文芸』一の四昭一六・七
(6) 殷允芃編、丸山勝訳『台湾の歴史―日台交渉の三百年』藤原書店平八・一二　黄昭堂『台湾民主国の研究』東京大学出版会　昭四五・七
(7) 『大正九年　現在の台湾』一〇、台湾総督府、大九・一二
(8) 台湾総督府、大五
(9) 春日賢一著、昭二・三
(10) 山根勇蔵著、杉田書店、昭五・五
(11) 注3と同じ
(12) 注2と同じ
(13) 孔尚任作。明朝の崩壊とその末路、その混乱の中、純粋に恋に生きようとした若い二人の姿がクローズアップされ、描写されている。佐藤春夫は『桃花扇』について、『秦淮畫舫納涼記』の中で、「もつとも南京では秦淮を見たいといふ註文を出したのは自分であつた…板橋雑記は無論、桃花扇傳奇を読んでもこの地を見て置きたくなつてゐる。」と記している。

佐藤の『桃花扇』についての記述と、『桃花扇』中の扇の設定や若い二人の物語、時代の枠組みなどの類似点から、筆者は佐藤が『女誡扇綺譚』を創作する際、『桃花扇』を参考にしたと推測する。

(14) 「台湾議会設置請願運動に関スル当局ノ談」(『下村宏文書』大一〇)の中に、「同文同種本質に於テ同化ノ可能性ヲ有スル」という言葉がある。
(15) 松風子「『女誡扇綺譚』の話者について」『文芸台湾』第五号、昭一五・一〇
(16) 注2と同じ
(17) 「佐藤春夫『植民地の旅』をめぐって」『成蹊国文』第八号、昭四九
(18) 注17と同じ
(19) 注5と同じ
(20) 『最近の南部台湾』(台湾大観社　大一二・四)によれば、「アヘン煙膏を製造する場合には、その原料をケシの実から取ることが無論であるが、現今は主に印度産並に波斯のものを輸入して居る。(中略)更に大正六年には台湾で此栽培を始めた」という。
(21) 前掲『近代日本研究双書　台湾統治と阿片問題』によれば、「『台湾日日新報』は台湾総督府、『台湾新聞』は台中州、『台南新報』は台南州、それぞれ官報を兼ねている。この三紙のことを「御用新聞」という。
(22) 注3と同じ
(23) 注2と同じ
(24) 注1と同じ

(シュ　エイコウ　筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科　文学)